

【研究発表】

①黄省曾本『謝康樂詩集』とその「古本」について—温州における謝靈運の伝承を手がかりに

大阪大学人文学研究科研究生 鮑功瀚

魏晋南北朝時代の詩文集は、元のままで残っているものはほとんどない。現在読めるものの大半は、明代以降に輯佚されたものである。謝靈運の作品の場合も、その例外ではない。盛唐時代までは広く流布していた謝靈運の全集は、北宋初期には散逸したと考えられる。

謝靈運の作品の輯佚に関しては、注目すべき資料が存在する。それは明代中期に、復古派の知識人である黄省曾が入手した「古本」に収める十三首の詩である。この十三首の詩は、黄省曾が編纂した現存する最古の謝靈運詩の輯佚本である二巻本『謝康樂詩集』の上巻に収録されている。

黄省曾が輯佚した十三首の詩の一部または全文は、『太平寰宇記』の温州の項や『弘治温州府志』など、温州地方の関連する文献に少なからず引用されている。それに対して、他の書物にはほとんど言及が見られない。この十三首は、謝靈運が太守として赴任した地である温州地方（永嘉）に伝承されてきた作であったと考えられる。

魏晋南北朝時代の詩文集の流伝状況に鑑みると、黄省曾が入手した「古本」に収める十三首は、かつて存在した謝靈運の全集から温州関連の詩を抄出したものではなく、南宋期の温州地方の士人もしくは地方官が、散逸状態のまま温州地方に伝承された詩を輯めたものだと推測できる。

謝靈運の人物像は、『宋書』の伝においては否定的に述べられている。ところが、温州地方では唐代の頃から、良き地方官として認識され、広く慕われていた。黄省曾が輯佚した十三首の詩からは、そのような謝靈運像が浮かびあがってくる。謝靈運が温州地方の民を慈しみ、また温州地方の山水に親しんだ事跡を伝える文献として、温州地方に長く伝承されていたのである。

黄省曾輯佚の十三首は、単に新たに発見された謝靈運の作品として価値を持つだけではない。正史とは異なる謝靈運像が記されているなど、謝靈運に対する理解をより一層深める上で貴重でかけがえのない資料である。

②後漢における天下観と交阯刺史部

東京大学特任研究員（日本学術振興会特別研究員-PD）青木竜一

一般に、後漢の天下は十三州から成り、そこに百余りの郡国が属したとされる。ただ、より正確には、後漢の十三部は、首都圏である司隸校尉部、豫州刺史部などの十一の州部、そして交阯刺史部とで構成されていた。このうち司隸校尉部は、別名「司州」と呼ばれ、他の十一州とは異なり特殊性を有するものの「州」としての扱いを受けていたが、交阯刺史部のみは制度上「州」の扱いを受けていなかった。そのため、後漢を通じて計2回にわたり、交阯刺史部を「州」に昇格させようとする運動が起こり、最終的に後漢末に至って交阯刺史部は「交州」となり、後の王朝もそれを踏襲した。

漢代には、「天下（海内）」は「中国（九州）」と「夷狄（四海）」とによって構成されるという天下認識があった。また、五服の思想では、その外縁部に当たる荒服の地は、「中国（九州）」に含まれない「夷狄（四海）」の地とされていたが、後漢において交阯刺史部はまさに荒服の扱いを受けていた。

漢代の十一州は、いずれも儒家經典に見える古の九州制に由来してその区画と名称が定められていた。後漢末の軍閥政權も、あるいは後漢から独立した遼東公孫氏政權も、新たな州を建てる際には儒家經典に基づいて州を置いた。すなわち、後漢時代の州制は儒家の天下認識と大いに関連するものであった。すると、交阯刺史部を「交州」とすることは、古の州制には存在しない独自の州を置くことを意味する。実際に、交阯刺史部が「交州」になって以降、曹魏の「郢州」、孫呉の「広州」、西晋の「秦州」「寧州」など、古の州制に囚われない独自の州が相次いで置かれるようになる。その点でも、交阯刺史部が「交州」となったことは、州制の歴史における一つの画期と見ることができる。そのような観点から、本発表では、後漢の州制および交阯刺史部の「州」昇格運動に注目し、後漢における天下観と統治制度との関係について明らかにすることを図る。

③齊梁艶詩と仏教

徳島大学 大村和人

本発表者はこれまで六朝時代、特に齊梁時代の艶詩を研究してきた。従来、この時代に儒教の束縛が緩んだために艶詩が流行したと説明されることが多かった。しかし、本発表者はこの時代に多数制作された艶詩の研究を通して、この時代の少なからぬ艶詩が儒教思想に基づいているという見解を提示した。

先行研究の中には、この時代に儒教に代わって仏教が流行したことを指摘し、それが艶詩にも影響したとするものがある。それに対して、仏教と艶詩との関係を否定する研究もある。

発表者は上記のような研究を行ってきた者として、幾つかの艶詩作品を分析し、当時の崇仏活動の実態を示す資料をも参照することによって、齊梁艶詩と仏教との関係に関する見解を本発表において示したい。

④漢魏における楚歌体について

東京大学 谷口 洋

前漢には楚辞の模擬的作品がいくつも作られるのに対し、後漢以降は楚辞の体によりつつ楚辞とは一線を画した賦が流行し、騷体賦と呼ばれる。ただ楚辞の体といっても、奇数句末に兮字を置く「離騷」の体と、句中に兮字を置く「九歌」の体とでは、全く異なる現れ方をするのだが、これまではその点が十分注意されてこなかった。

「離騷」体の賦は、両漢の交に一人称で自己を語る文学として確立し、魏晋とりわけ西晋に最盛期を迎える。それに対し「九歌」体の様相はずっと複雑であり、そのすべてを『楚辞』『九歌』の継承

としてひとくくりにするのはためられる（よってここでは「楚歌体」の称を用いる）。そこにはむしろ、賦・歌・詩といった多様なジャンルの混淆がみられるのである。

前漢においては、楚歌体の句は他の句型と交じり合うことがなかったが、後漢の張衡あたりから、この句型を他の形式の中に取り込んで用いることが行われる。そして建安になると、ほぼ全篇が楚歌体からなる賦や、兮字を用いない六言句の中に楚歌体を交える賦が現れる。建安に至ると、楚歌体は表現手段の一つとして自由に使いこなされていたといえよう。さらに重要なのは、これらの賦が古楽府や古詩と親近性を持つことである。それは愛情・友情・離別といった主題についても、個々の表現についても指摘することができる。

建安の楚歌体について、そのどこまでが楚辞の自覚的な摂取であったかを判定することは難しい。そもそも「九歌」自体、屈原が楚の祭祀歌の卑俗さを見て改作したという伝承に見るように、本来の祭祀歌とは異質な要素を多分に含んでいた。「離騷」が屈原と結びつき、知識人の自己語りとして展開したのに対し、「九歌」ないしはそれに連なる表現は、歌や詩とも交わりつつ伏流水のように流れ続け、それが噴出したのが建安文学だったのでなかろうか。

⑤曹植の文学と西晋時代の人々

県立広島大学 柳川順子

西晋王朝で演奏された俗楽系宮廷歌曲群に「清商三調」と「大曲」とがある。このうち「清商三調」は、これらの諸歌辞を収載する『宋書』卷二十一・楽志三に記すとおり、西晋の荀勗が、漢魏時代の旧歌辞から選んで宮廷歌曲に適用したものである。一方の「大曲」については、「清商三調」の成立後、同時代の張華によって編成されたものであると推定し得ることを、発表者は先に「晋楽所奏「大曲」の編者」（『九州中国学会報』第62巻、2024年5月）において論証した。その際、根拠のひとつとして提示したのが、「清商三調」は曹植の歌辞を一篇も含まないのに対して、「大曲」には「置酒・野田黄雀行」（『文選』卷二十七には「箜篌引」として収載）一篇が組み入れられているということである。なぜこのことが、上述の推定の根拠たり得るのか。

本発表では、まず、この拙論の骨子を示した上で、曹植「置酒・野田黄雀行」の内部に分け入り、この歌辞が「大曲」の編者によって選り取られた理由、及びそれが「野田黄雀行」の楽曲に乗せて宮中で歌われたということの意味を探りたい。そのための方法として、「置酒高殿上」を冒頭句とする「野田黄雀行」（別名「箜篌引」）と、「高樹多悲風」を冒頭句とする「野田黄雀行」（『樂府詩集』卷三十九）との間に、曹植の別の作品「贈丁翼」詩（『文選』卷二十四）を介在させ、三者を併せて読み解いていくという道を取る。その先には、西晋王朝の人々の胸中に生きる曹植の人物像が浮かび上がってくるだろう。加えて、西晋時代の陸機の作品の中に、曹植固有の表現が息づいていると確認される事例を幾つか挙げて、曹植と陸機という時を隔てた二人の詩人の間に、文学的交流と呼び得るものがたしかに認められること、そして、彼らをつないだ人物は、「大曲」の編者と推定し得るのであった張華だったのでないかとの見通しを述べてみたい。